

島根の多彩な医師の働き方
キャリアを支援します！

えんネット

Support Magazine 2021 No.08

Special Discussion

女性医師も活躍中！

“島根東部で患者の生活を支える医師たち”

松江生協病院



発行元

島根大学医学部地域医療支援学講座

島根県・しまね地域医療支援センターから財政支援を受けています。

PICK UP

イベントなど“えんネット”の取り組み紹介

●男女共同参画講義

医学生のうちから、ワークライフバランス・キャリア形成について考えることを目的に平成26年度から臨床実習入門として男女共同参画講義を行っています。

広島大学医学部附属医学教育センター教授 蓮沼直子先生をお招きし、医学部4年生を対象に行っています。地域医療支援学講座は、学生たちがキャリアを大切に働き続けるために、「えんネット」の取り組みや支援内容についても周知します。

●ワークライフバランスセミナー

「男性育休が働き方も組織も変える」をテーマに開催しました。学内で育休を取得された男性医師2名と、特別講演として、NPO法人ファザリングジャパン理事の徳倉康之先生にお話しいただきました。

●えんネット交流会

年2回、女性医師や学生が集まり、働き方などについて楽しく話合っています。

●復職支援

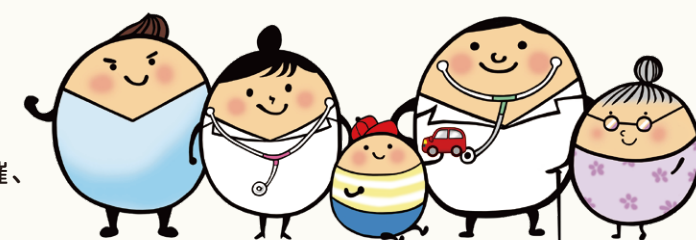
ライフイベント、退職後の相談も受け付けています。



ワークライフバランスセミナー

えんネット

えんネットではキャリア支援から託児付きセミナーの開催、学生教育までさまざまな支援を積極的に行っています。



キャリア支援 両立支援

- 相談窓口
- 就労環境改善の取り組み
- 託児付きセミナー
- 交流会 など

育児・介護支援 情報提供

- 県内病院就労支援
- 県内自治体保育支援
- 支援情報へのリンク

学生教育

- キャリアモデル実習
- キャリア教育
- キャリアウエビナー

<https://www.en-net.jp/>

えんネット

検索

連携団体

- しまね地域医療支援センター
- 島根県 赤ひげバンク
- 島根県医師会
- 島根大学 ダイバーシティ推進室
- 島根大学医学部附属病院
ワークライフバランス支援室

えんネット

島根大学医学部地域医療支援学講座内

〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1

TEL & FAX : 0853-20-2396 E-mail : en-net@med.shimane-u.ac.jp



発行 / えんネット
2021年12月

尾上：私は島根大学を卒業し、当院で初期研修1年目を過ごしました。2年目は外の病院へ研修に行きましたが、その後、消化器内科医として再び松江生協病院に赴任してからは、ここでの診療を続けています。妻も消化器内科の医師として別の病院に勤めており、2人の子どもを育てています。

大西：私は今年の4月から当院で初期研修を受けています。もともと大阪の病院で臨床工学技士として働いていたのですが、一念発起して医師を目指すことに。すでに結婚して2人の子どもがいたのですが、たまたま目にしたハングリーのセゲド大学に興味を持ち、家族で移住しました。2019年6月に卒業して日本に帰国。日本で診療を行うために、日本語診療能力調査を経て、医師国家試験を受験しました。

佐野：戸田先生の女性診療科では、具体的にどのような患者さんを診られているのでしょうか？
戸田：一番多いのは40〜50代の更年期の患者さんですが、女性の一生を診ることをテーマにしているのも、思春期や婦人科疾患の増えてくる成熟期、学校での性教育にも携わっています。女性の場合、生理やお産、閉経など、女性ホルモンの働きによってライフステージが分けられているので、産婦人科医による総合的な診療が適しているのです。
佐野：女性の生き方そのものも変わってきていますよね。
戸田：そうですね。女性診療科には何らかの不調や機能不全でお困りの方が受診されますが、病氣自体の治療が難しいというよりは、その方の家庭や職場の環境、経済的、心理的なもので問題がより複雑になってしまっているケースが多くみられます。例えば切迫早産で診断書を出しても、それを会社に提出せずに働き続けてしまう。休みたいと言えない状況があるのです。病氣の治療法が分かっているのに、それだけでは解決できないのを実感しています。
佐野：さまざまな面からアプローチしなければならぬですね。患者さんにとっては女性の先生だと話しやすいのでは？

座談会のファシリテーター

島根大学医学部
地域医療支援学講座 教授

佐野 千晶

さの ちあき

1994年島根医科大学卒業、微生物学などを経て現職。



島根大学医学部
地域医療支援学講座 助教

堀田 優希江

ほった ゆきえ

2009年島根大学医学部卒業、島根大学の耳鼻咽喉科での勤務を経て2020年から現職。3児の母。
「えんネット」相談窓口を担当。ワークライフバランスに関する調査研究、復職支援、女性医師支援などを行う。



松江生協病院 院長

専門：整形外科
2012年より院長

高濱 顕弘 先生

たかはま あきひろ

1983年鳥取大学医学部医学科卒業。鳥取大学医学部附属病院にて整形外科医員として勤務。その後、山陰労災病院、清水病院などを経て2003年総合病院松江生協病院に勤務。2012年同院長に。



島根県松江市で 地域医療を支える診療を

佐野：今回は、島根県東部エリアの基幹病院である松江生協病院の先生方にお集まりいただきました。はじめに簡単な自己紹介をお願いします。

戸田：私は鳥取大学を卒業後、産婦人科に入局し、それからずっと産婦人科医として診療をしています。松江生協病院に赴任したのは1995年からのので、もう26年。気持ち良く仕事ができている。当院では現在、分娩は扱っていませんが、女性のヘルスケアに関わる女性診療科を担当しています。

仲田：私は島根県立中央病院で初期研修を受けて、その後は島根大学で内科学第一（糖尿病・内分泌疾患を扱う内科）に入局しました。松江生協病院には2017年から常勤医として勤務しています。プライベートでは小学生と保育園児、3人の子の育児中です。今は時短勤務で、仕事と家庭を両立しながら余裕を持って働かせてもらっています。



女性医師も
活躍中！

Special Discussion

“島根東部で患者の生活を支える医師たち”

松江生協病院

今回取材したのは島根東部にある松江生協病院。救急・急性期・回復期・慢性期までを担うケア・ミックス病院として、質の高い医療を提供されています。研修医の教育にも力を入れていて、定期的に行われるカンファレンスや勉強会での熱心な指導に特徴があります。そんな地域の総合病院で働く4人の先生たちに、病院の魅力や女性医師ならではの働き方、患者さんのニーズに応える診療について話をお聞きしました！



戸田：体のことや社会的な立場など、同性だから理解しやすいというのはありますね。私が医師になったばかりの頃は女性の産婦人科医はほとんどいなかったたので、「患者さんからは人気だよ」と勧誘していましたが、今ではだいぶ増えました。最近では「男性医師でもできるよ！」と勧めています(笑)。

診療科の垣根を超えて 幅広く学べる研修

.....

堀田：大西先生はなぜ松江生協病院を研修先選ばれたのですか？

大西：出身が隠岐の島なので、いずれは島根に帰りたいという思いがありました。当院には初期研修医が私を含めて5人いて、和気あいあいとした雰囲気です。研修を受けています。今は尾上先生がいっぱい消化器内科を回っているのですが、とても優しく教えていただいています。

堀田：同院ならではの研修の特徴はありますか？

大西：例えば、心筋梗塞で運ばれてきた患者さんを救急で診て、慢性期の段階に移行してもそのまま継続して診られるなど、急性期から慢性期まで対応するケア・ミックス型の病院ならではの診療を経験することができます。私もこれまで何人かの患者さんを担当させてもらいましたが、経過をたどりながら長く診ている方もいます。

についても学ぶことができる。専門以外にも幅広く経験を積める環境がここにはあります。

長く働き続けるために 女性医師のスキルアップ

.....

堀田：働き方で工夫されていることはありますか？

仲田：私はまだ子どもが小さいので当直を免除してもらうなど、業務をフレキシブルにしていたらいいので働きやすいです。周りの先生たちにはいつも感謝しています。

尾上：女性、男性にかかわらず、対応できる医師がフォローする雰囲気がありますよね。私自身、子どものことで急遽救急外来の当番を別の先生に代わってもらったこともあります。お互いにサポートし合える関係なのがいいですね。

堀田：仲田先生は子育てをしながら専



尾上：大西先生はとてもまじめに研修を受けてくれているよね。当院で力を入れているのが、患者さんの生活に即して退院できるかどうかを検討する

ICF(国際生活機能分類)カンファレンス。医学的な面だけではなく、家族構成や自宅、職場の環境といったことまで含めて多職種で話し合います。そうしたカンファレンスも勉強になっているのではないのでしょうか。

大西：そう思います。ICFカンファレンスの他にも、循環器内科の先生に指導していただく心電図学習会、患者さんのカルテを見ながら症例を検討する総合診療カンファレンス、救急症例から学ぶ救急カンファレンスと、さまざまなジャンルで手厚い指導を受けています。

尾上：研修で大事なものは自主性です。だから指導では、研修医からの質問にあえて答えを言わずに、「これは調べてみよう」と声をかけることもあります。



門医資格を取得されたとか。

仲田：はい。一人目を妊娠したときに認定内科医を、二人目のときに糖尿病専門医と内分泌代謝科専門医、三人目のときに総合内科専門医の資格を取得しました。糖尿病を専門に選んだのは、医師としてずっと働き続けたいと思ったからです。手技の研鑽が必要な診療科では、出産・育児によるブランクがあると、周りはそう思っていないまでも自分が遅れているような気持ちになってしまふのではないかと思います。

堀田：実際に復職されたときはいかがでしたか？

仲田：やはり一人目のときは「1年でどれだけ遅れてしまったのだろう……」と怖くなりましたが、いざ復帰してみると思っていたよりもスムーズに診療に戻ることができました。糖尿病は急展開するような疾患ではないので、そんなに遅れをとっていないと感じることはなかったですね。それで自信が持てたのだと思います。

自分で問題提起をしながら調べていく。そうやって考える力を身に付けてほしいと思っています。

堀田：尾上先生は松江生協病院で初期研修を受けられたのですよね。

尾上：はい。私が初期研修を受けたのはもう8年前になりますが、今でも変わっていないのが診療科をまたいだ研修ができることです。例えば消化器内科の研修中でも、症例があれば循環器疾患や糖尿病について専門の先生に相談しながら診ることがあります。研修ではどうしても1、2カ月で診療科をローテーションすることになります。当院では研修医が希望すれば、診療科が変わってもそのまま同じ患者さんを担当できます。

堀田：診療科を横断的に研修ができるのは魅力ですね。

尾上：私が勤務先として当院を選んだのも同じ理由からです。消化器内科に所属しながら、自分の興味のある脳卒中や神経難病、糖尿病、在宅医療の分野



堀田：診療を続けてこられただけでなく、妊娠・出産のたびにスキルアップされていることに驚きました。

仲田：3人目の出産後は時短勤務にさせてもらっていますが、それまではフルタイムで勤務していましたし、救急外来にも入っていました。育児と糖尿病治療はどこか通じる場所もあり、それぞれの経験が活かせる場面もあるんです。

堀田：戸田先生は女性医師としてのキャリアアップをどのようにお考えでしたか？

戸田：私の場合はあらかじめ計画を立てたというよりは、患者さんを診ながら「これは必要だな」と思ったスキルを身に付けていったかんじです。女性診療科を立ち上げてからは特に、診る患者さんの傾向が変わってきたので、例えば摂食障害で無月経になった患者さんに対応するために臨床心理士の資格を取得したり、更年期治療のために漢方医、働く女性の体調管理のために産業医を取得したりと、診療の内容に応じて取り入れてきました。

堀田：患者さんのニーズに合わせてスキルアップしてこられたんですね。

戸田：そうですね。心理的、社会的な問題を抱える患者さんには、私たち医師が上の立場から指導してもなかなか状況が変わりません。共感する、話をよく聞くといった患者さんに寄り添うアプローチが必要なのです。

臨床工学技士から医師に。ハンガリーの医学部で学びました

初期研修医1年目
大西 浩生 先生
おおにし ひろき
セゲド大学(2019年卒)



指導では考える力が身に付く研修になるよう心がけています

内科(消化器)
尾上 正樹 先生
おのえ まさき
島根大学(2013年卒)



3人の子育ての経験が診療にも活かされています

内科(内分泌代謝)部長
仲田 典子 先生
なかた のりこ
北里大学(2008年卒)



女性の一生に寄り添い、健康を支えています

女性診療科 部長
戸田 稔子 先生
とだ としこ
鳥取大学(1983年卒)



えんネット

について



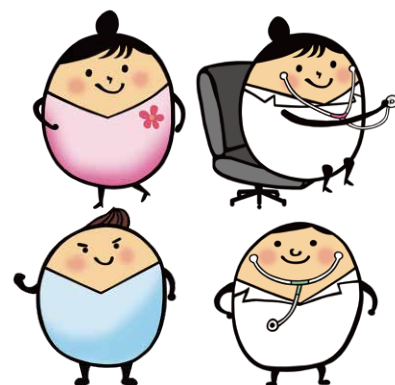
しまね地域医療支援センターの委託を受け、平成26年度より、島根大学医学部地域医療支援学講座内に両立支援のための相談窓口『えんネット』が設立されました。

出産・育児・介護などのライフイベントで働き方に悩みを抱えている方々がキャリアを継続できるよう支援いたします。

また、「働き続けたい」という意識を育てるために、学生時代からのキャリア教育や、すべての医師の働きやすい職場をめざした、就労環境支援、託児などに考慮した両立支援を行っています。

相談窓口

えんネットでは、現在の働き方に悩みを抱える方のための相談窓口を設置しております。個々に応じた復職への相談も受け付けております。専門科に応じた対応が必要な場合は、支援担当員としてご協力いただく、専門科の先生に相談することも可能です。また、復職相談については学内外と連携をとりながら、段階的な支援を行っています。加えて、女子学生の女性特有の相談に対しても、女性スタッフが対応しています。どんなことでもお気軽に相談してください。



セミナーなどに託児をつけます

子育て中の医師も学びやすいよう、セミナーなどに託児をつける支援を行っています。また、島根大学医学部附属病院クリニカルスキルアップセンターにてシミュレーショントレーニングの託児付受講もできます。



医師密着型実習

医師密着型実習とは、島根でがんばる医師のもとで実習を行い、自分の将来像を探すことを目的にした実習です。実習では、医師の一日の始まりから終わりまで密着し、仕事以外の保育園の送迎や家事などの生活場面についても見学させていただきます。参加した学生さんからは「先生の結婚・出産の頃のお話も伺い、やりたいことをあきらめずに継続されている強さに自分も勇気ができました」といった意見がありました。

**風通しの良い風土で
医師一人ひとりが活躍できる**
佐野：医学生の方々にメッセージをお願いします。
尾上：当院での研修は、患者さんのもとをトータルで診たいという人には特におすすめです。診療科にこだわらずに、幅広く診療に携わりたいという方にはぜひ来てほしいですね。
戸田：病院の規模が大きすぎず、小さいながらも良いところ。医師同士の顔が見える関係性なので、医局での立ち話だけでいろいろな相談ができます。診療科の垣根がなく、家族のような雰囲気があります。



仲田：初期研修医の先生たちが各学年に4、5人ずつ、さらに後期研修の先生たちもいらつしゃるので、研修について気軽に相談できると思います。研修医にとって、同期や少し上の先輩たちの存在は心強いのではないのでしょうか。また、当院のように診療を通して患者さんの生活面まで考える視点を身に付けられるのは、医師としての強みになります。
佐野：医師としてスタートを切るのに素晴らしい環境ですね。今後、力を入れていきたい取り組みや目標はありますか？
戸田：私の働き方が後輩の女性医師たちにとって一つの選択肢となるような、ロールモデルになればと思っています。産婦人科医を長く続けていると、自分が不妊治療やお産に関わった方がその後、更年期障害の治療に來られたり、お子さんたちが女性診療科を受診されたりと、家族まるごと診ていくような経験ができます。そうしたつながりを感じられるのも嬉しいですね。
尾上：私は、消化器内科でがん末期や高齢の患者さんを多く診ているのですが、終末期の状態をどのように過ごすのか、在宅支援も含めて勉強しているところです。例えば自宅療養では、症状を和らげるための薬の投与にご家族の協力が必要です。スムーズに在宅医療につなげられるように、そうした退

院後のアドバイスもできるようにしたいと思っています。
仲田：現在、院内には糖尿病の専門医が一人しかいません。療養指導をする資格のあるスタッフも数人いますが、糖尿病の患者さんの数やニーズを考えるとまだ十分には指導が行き届いていないのを感じています。そこで、病院内全体としての糖尿病に対する知識を上げるために、院内スタッフに向けた勉強会に力を入れていきたいと思っています。院内でも、院外に対しても啓蒙活動を行ってきたいです。
大西：私が医師になろうと思ったのは、臨床工学技士として働いていたときに出会った一人の先生がきっかけです。とても優れた診療スキルをお持ちの先生で、患者さんやコメディカルに對しても分け隔てなくフランクに接しています。私もそんな医師になれるよう努力していきたいです。
佐野：松江生協病院の先生方のお話からは、診療科を超えて連携をとられている風通しの良さが伝わってきました。専門領域以外でも自分の興味のある分野について積極的に学べるところが魅力だと思います。研修医の指導にもとても熱心なので、今後、若手の先生たちのますますの活躍に期待したいです。今日は貴重なお話を、どうもありがとうございました！

えんネット × 松江生協病院 HOSPITAL DATA



診療科を超えた複数科の医師や、看護師、リハビリスタッフが、自宅復帰後の問題を解決するために開いているICFカンファレンス。健康状態やどのぐらいの生活機能があるのか、家庭や社会活動には参加しているのか、地域のコミュニティとの関わりはあるかなど、疾患だけでなく一人ひとりが抱える背景に考慮しながら、患者さんにとってベストな解決策を探っています。



松江生協病院
〒690-8522 島根県松江市西津田8-8-8
TEL : 0852-23-1111 FAX : 0852-26-4104
E-mail : m.hakuishi@matsue-seikyo.jp
<https://www.matsue-seikyo.jp/>

